

近年の脱北者における脱北動機が多様化と「直行」： 韓国在住の女性脱北者へのインタビュー分析から

尹 鈇 喜

1. はじめに
2. 調査方法と対象者の概要
3. 近年の女性脱北者における脱北動機の特徴
4. 終わりに

1. はじめに

朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）を離脱して韓国に居住している者、いわゆる「脱北者」¹は、北朝鮮の食糧難が深刻化した1990年代後半から急増し、2014年にはその累積人数が約2万7千人に達している。特に、2000年代以降の脱北者における大きな特徴は、女性脱北者の割合の高さである（[表1]を参照）。

それゆえ、女性脱北者の増加原因、脱北過程の特徴、韓国社会への適応に関する社会的かつ学術的関心が高まっており、特に、女性脱北者の脱北過程における性的搾取や人権の被害、家族をめぐる問題に注目した研究が増えている（チョウ・ジョン，2005；イほか，2009；イ，2011）。これまで韓国に入国する女性脱北者の特徴は、北朝鮮居住時の経済的困難を乗り越えるために中国に出稼ぎ目的で脱北し、そこで長期間滞在をした経験がある者とされてきた（脱北女性連帯，2011）。しかし、近年、女性脱北者の脱北動機や脱北過程においても変化が見られ始めている。

そこで本稿では、北朝鮮を離れて韓国に定着した女性脱北者の脱北動機、および「直行」と呼ばれる当初から韓国を目指した脱北の背景について、家族関係に注意を払いなが

1 彼・彼女らを指す言葉は、「脱北者」以外にも「帰順者」、「帰順勇士」、「帰順北韓同胞」など様々である。1997年に法律用語として「北韓離脱住民」（北朝鮮に住所・直系家族・配偶者・職場などを置いている者で、北朝鮮を離脱した後、韓国以外の国籍を取得していない者と定義）が用いられるようになった。また、2005年には「脱北」というネガティブなイメージを改善する目的で、韓国政府が「セト民」（新しい土地で人生への希望を抱いて生きる人という意味）という呼び名を発表したが、当事者からの反発を受け、公式用語としては使わなくなった。こうした状況に鑑み、本稿では、韓国内外で広く使われている「脱北者」という用語を用いる。

年	～1998	1999～ 2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
男性（人）	831	565	510	474	626	424	515	573
女性（人）	116	478	632	811	1,272	960	1,513	1,981
合計（人）	947	1,043	1,142	1,285	1,898	1,384	2,028	2,554
女性割合（%）	12	46	55	63	67	69	75	78
年	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	合計
男性（人）	608	662	591	795	404	369	235	8,182
女性（人）	2,195	2,252	1,811	1,911	1,098	1,145	896	19,071
合計（人）	2,803	2,914	2,402	2,706	1,502	1,514	1,131	27,253
女性割合（%）	78	77	75	70	72	76	79	70

表1 韓国に入国する脱北者の数²（統一部）

ら、その実態を明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法と対象者の概要

本稿では、2014年8月に筆者が韓国に在住する女性脱北者4名に実施したインタビュー調査のデータを用いて分析を行う。対象者へのアクセスは、まずは韓国内外で北朝鮮に関連する支援を行っている NGO 団体「韓国カリタス」に脱北者の紹介を依頼し、さらにインタビューに応じた対象者に知人の脱北者を紹介してもらうスノーボール方式を併用した。対象者の選定基準は、近年の脱北動向を探るため、2005年以降に北朝鮮を離脱し、韓国に定着してから1年以上経つ20代～40代の女性とした。対象者の基本属性については、[表2]を参照されたい。

インタビューは、対象者あるいは調査協力者の自宅かその周辺の食堂で約1～2時間ほど行い、調査者があらかじめ用意した質問を基に、インタビューの流れによって質問の内容を調整していく半構造化インタビューを利用した。北朝鮮にいた頃から現在に至るまでのライフヒストリーを明らかにすることを目的とし、具体的には、①進学、就職、結婚、出産といったライフイベント、②脱北を決心した動機と韓国に入国するまでの脱北過程、③韓国社会での適応、家族関係、将来への希望などを尋ねた。インタビュー内容は、対象者の同意のもとに録音を行い、文字起こしをして分析を行った。インタビューは、すべて韓国語で行われたため、本稿の分析に用いている語りの引用文は、著者が日本語に翻訳し

2 統一部、『北韓離脱住民政策 北韓離脱住民現況 1. 入国現況（14年10月末入国者基準）』。
（= 통일부, 『북한이탈주민정책 북한이탈주민현황 1. 입국현황（14년 10월말 입국자기준）』。）
http://www.unikorea.go.kr/index.do?menuCd=DOM_000000105006006000（2015年1月8日最終検索）より筆者が作成。

名前	年齢 ³	出身地	学歴 ⁴	在北時の職業	現在の職業	月収 ⁵	脱北時期	韓国入国時期	在中期間	脱北経路	韓国入国時の同伴家族／呼び寄せ家族	朝中韓における結婚／子どもの有無	現在の居住地
1 Aさん	45歳	両江道	短大、大学(韓)	軍部隊の事務管理や家族の管理	北朝鮮関連記者	13万円	2009年	2010年	1年	北朝鮮(鴨綠江)→中国(延辺)→ラオス→タイ→韓国	娘と入国、後に母親を呼び寄せ	朝：結婚(死別)／娘1人(19歳) 中：無 韓：結婚(朝鮮族、離婚)	ソウル
2 Bさん	42歳	両江道	短大	電波監視所→洋服屋→皿の販売	脱北者芸術団事務→職業紹介所	13万円	2009年	2010年	3ヶ月	北朝鮮(鴨綠江)→中国(長白→長春)→ラオス→タイ→韓国	先に長男が単身入国、次男と入国、後に母親を呼び寄せ	朝：結婚(離婚 ⁶)／息子1人(16歳) 再婚(離婚)／息子1人(11歳) 中：無 韓：無	全羅南道→ソウル
3 Cさん	39歳	両江道	短大	美容師→素麺の販売	美容師→食堂、家政婦、ホステス	22万円 ⁷	2009年	2010年	1ヶ月	北朝鮮(鴨綠江)→中国(延辺→瀋陽)→ラオス→タイ→韓国	夫・息子と入国	朝：結婚／息子1人(9歳) 中：無 韓：離婚調停中	ソウル
4 Dさん	28歳	咸鏡北道	短大、大学休学中(韓)	乗務員	食堂→専業主婦	30万円(夫)	2009年	2010年	1年	北朝鮮(豆満江)→中国(延辺)→ラオス→タイ→韓国	単身入国(友達と入国)	朝：無 中：無 韓：結婚(北朝鮮)／息子2人(2歳、11ヶ月)	京畿道→ソウル

表2 調査対象者の属性

- 3 表における年齢は、インタビューを行った時点のもの。
- 4 韓国で取得した学歴の場合は(韓)と表記している。
- 5 月収を「ウォン」から「円」に換算している。また、夫の収入の場合は(夫)と表記している。
- 6 本人や配偶者の脱北、失踪によって夫婦が別れた場合は(離婚)と表記している。
- 7 22万円のうち10万円は夫が第2期のガンのため、受給している基礎生活受給費であり、その他に本人のアルバイト収入がある。

たものである。引用文は、斜体で示しており、筆者が略した箇所は、〈略〉で示し、補った箇所は、（ ）で示している。

3. 近年の女性脱北者における脱北動機の特徴

本節では、韓国に入国した女性脱北者の語りのうち、近年の女性脱北者に見られる脱北動機の特徴に注目し、その内容についての分析を行う。主に注目するのは、脱北動機の多様化と、「直行」と呼ばれる当初から韓国を目指した脱北の背景についてである。

(1) 脱北動機の多様化

1) 政治的や経済的理由ではない脱北動機

これまでの多くの脱北者研究で指摘されてきた脱北動機に関する重要な知見は、90年代までは政治的な理由による脱北が主流であったが、2000年以後、生活の困難という経済的な理由による脱北へと、その動機が変化してきたというものであった（ユン、2004）。しかし、近年における脱北者の脱北動機の変化はこうした単線的なものに限られない。例えば、2012年に北韓離脱住民支援財団で実施した実態調査によると、脱北者の脱北動機（複数応答）で、「食料不足と経済的困難」による脱北（52.8%）のみならず、「自由のために」（32%）、「北朝鮮の体制への不満」（23.6%）、「お金を稼ぐため」（19.0%）、「家族の説得」（15.0%）、「離れた家族を探すため」（9.4%）、「身の危険のため」（9.4%）というように様々な理由が挙げられている。筆者がインタビューを行った4名の対象者も同様に、生活の困難にのみには還元できない脱北動機を見いだすことができた。

Aさんは、夫との死別後、軍部隊の事務管理や家族の管理をしながら生計を立てており、中学生の娘も商売が上手であったため、北朝鮮では比較的安定した生活をしてきた。しかし、北朝鮮で不法行為である商売を続けるためには、保衛部⁸に賄賂を渡し続けなければならない、Aさんはいつ財産を没収されてもおかしくないという不安を常に抱いていた。ある日、彼女たちの商売を認めてくれていた保安員ではない、別の保安員との葛藤が生じたことで、Aさんはこのままではいつまでも安定的な生活が実現できないことに気づいた。

Aさん：私たちは、北朝鮮で餓えていて、生活が苦しくて脱北したわけではありません。（略）中国へ行ったきっかけは、保安員とのケンカです。だから、北朝鮮の保安員は

8 国家安全保衛部の略語。秘密警察及び情報機関であり、北朝鮮内外における政治及び思想動向の監視、視察を行う。法的な手続きなしで、逮捕、政治犯収容所送り、死刑までを可能とする強い権限を持っている（統一部統一教育院、2013）。

本当に…、私たちは保安員と親しかったので、保安員と関係が良かったのです。だけど、私が知っている保安員とは問題ないけど、（私と）知らない保安員は、ただの保安員ですよ。私から何か奪おうとする、法を用いて人を苦しめようとする…。私たちから何かを奪い取りたいからあれこれけちをつけて、お金をもらおうとして…。

このように、Aさんは、「北朝鮮で餓えていて、生活が苦しくて脱北したわけではない」と述べており、経済的困難ではなく、より安定的な生活のために脱北を決心したと述べている。

また、夫の脱北による離別を経験し、生計を立てるために母親と一緒に商売を始めたBさんの場合も、中国から密輸した皿の販売が成功し、食糧難で厳しかった時期にもゆとりのある生活ができたという。彼女は、脱北を決心したきっかけについて、生活の困難ではなく、「自由を束縛する」ことから逃れるためであったと、次のように述べている。

Bさん：「苦難の行軍」⁹の時期にみんな、草のおかゆも食べられなくて貧しかった時、私たちはむしろお金を稼いでいたので豊かでした。お米も食べて、食べたい物は何でも食べられて、着る物にも困らなくて、裕福でした。（略）調味料や油も切らすことはなく、贅沢はできないけれど、ちょっと工夫すれば色々な食べ物を食べることができました。だけど、この話をすると、みんななぜここ（＝韓国）に来たのかと言うんですよ。北朝鮮ではあまりにも人を制限しちゃうでしょう。だから、自由…自由を束縛するからね。

Bさんも脱北動機について語る際、「私たちはむしろお金を稼いで豊かでした」と言及することで、自分は従来の脱北とは異なる動機であることを強く主張している。

このように、近年の女性脱北者の脱北は、政治的理由や経済的理由だけではなく、より安定的な生活や行動の自由を求めるなど、従来指摘されてきたそれとは異なる多様な動機が窺える。

2) 子どものための脱北

こうした多様化する脱北動機において、特に注目されるのが「子供のため」という意味づけである。

9 1996年1月1日の3紙共同社説（『労働新聞』、『朝鮮人民軍』、『青年前衛』）で使われた、飢饉と経済的困窮を乗り越えるためのスローガン。1938年11月～1939年3月に、金日成ら抗日パルチザンが満洲で日本軍と闘いながら行軍したことになぞらえている。2010年韓国の統計庁が国連の人口センサスに基づいて発表した北朝鮮人口推計によると、苦難の行軍（1996～2000年）の時期の餓死者数は、約33万人である。また、1990年代後半以後（1994～2005年）の食糧難により61万人の人口損失があったと推算される（統一部統一教育院，2013）。

Aさんの場合、当初は中国において娘を勉強させたい気持ちで脱北を決断したが、現在は韓国に入国して娘を韓国の大学に進学させている。また、Aさん自身も放送大学へ進学し、勉学の機会を手に入れている。Aさんは、脱北を実行したもっとも重要な理由として一人娘を「勉強させたい」ことであったと述べている。

Aさん：中国で暮らしながら子どもを勉強させるという考えでした。(略) 子どものためです。子どもをどうにか勉強させたくて(北朝鮮を)出たわけであって、それ以外は特に考えがなかったです。(略) 私は、子どものために脱北したので、子どもに良いかどうか、私にとって一番重要です。

1990年代後半の北朝鮮では、経済的困窮の影響で就学状況が悪化し、多数の教員や児童・生徒・学生が学校を離脱する状況に陥った。政府は、「平等主義」から「実利主義」へと教育方針を転換して教育の正常化のための努力を行った。しかし、公教育費の減少による私教育費の負担の増加、中等学校の序列化による入試をめぐる不正や賄賂の蔓延など、教育機会への格差がより広がってきた(イほか, 2007)。それゆえ、女性脱北者の中では、現在の北朝鮮の教育システムでは自らの子どもに適切な教育を受けさせることができないという判断を下した可能性がうかがえる。こうした実状の中でAさんのように、子どもにより良い教育の機会を与えられる方法として脱北という手段を選択したのだとも考えられる。

また同じ子供のためであっても、教育とは異なる側面の脱北動機も存在する。Cさんは次のように述べている。

Cさん：韓国では、たくさん(支援して)くれる。お金もくれるし、子どもを大事にしてくれると聞いたので。(略) 息子が大きくなってきて、あの子のことを考えると…北朝鮮では、父親が労働者だと、その子どもも労働者にならざるを得ません。そして、(息子が)軍隊へ行くことを考えると恐ろしくてね。北朝鮮では、軍隊へ行くと子どもたちは死にます。(略) 死ぬかもしれないのに(軍隊へ)行かせるのが本当に嫌で、私は息子を、私の息子の未来のために(北朝鮮から)逃げて来たんです。

Cさんの場合、北朝鮮では親の身分や職業によって子どもの将来も決まってしまうという身分制に対する失意、さらに、子どもの生命さえも脅かされる状況から、息子に未来の機会を与えるために脱北を選択したことが分かる。

以上のように、近年の女性脱北者の脱北動機は、食糧難による生活の困難という一時的な理由の他に、より長期的で多様な理由による脱北が看取され、その中では、特に子どもの将来に対する願望による脱北が目立つようになったことが指摘できる。

(2) 韓国行きを目的としての脱北——「直行」

本稿がインタビューの対象とした女性脱北者において注目に値する2つ目の特徴は、脱北を決心する際の脱北先である。従来の脱北者研究においては、脱北を決心する者には、生活の困難を解消するために、中国での出稼ぎを目的とする場合が多いことが指摘されてきた。特に、北朝鮮と中国が隣接する地域では、商売を行うために越境を繰り返す人々から中国に関する情報を得ることが容易であり、また、中国人男性との結婚の勧誘がある中で、中国へのあこがれが高まっていたというのである。そのため、韓国に入国する女性脱北者は、当初中国を目指して脱北し、そこで長期滞在をした経験を持っている場合が多い。つまり、中国において不法滞在者として生活する中で、(朝鮮族や漢族から)韓国に関する情報を耳にし、韓国行きを選択するようになったというのである(イほか, 2009)。

しかし脱北動機が多様化によって、彼女たちにとって北朝鮮にいる頃から韓国行きを目的地として脱北を決心させる可能性が生じている。つまり、脱北のはじめから中国をただの経由地として考えさせるようになってきているのである。このように、脱北当初から韓国行きを目的とし、中国には長期間滞在しない脱北過程を、韓国在住の脱北者は「直行」と呼んでいる。このことに関して、Bさんは次のように述べている。

Bさん：恵山(ハサン)出身の人は、暮らしが悪くありません。生活がそこまで大変では無かったので、だから恵山の人は中国へ行って、売られて暮らしている人が他の地域に比べると少ないです。(略)会寧(フェリョン)側はちょっと貧しいです。その出身の人は、昔(脱北して)来た人が多かったです。中国でずっと暮らしてから韓国へ来た人が多いです。恵山から来た人は「直行」が多いです。だから、中国を経由してすぐ韓国へ向かいます。だけど、ずっと前(脱北して)来た、(脱北してから)長い人は、生活が大変で、食べ物に飢えて、中国へ行って、中国でずっと暮らしてから(韓国へ)来るんですよ。恵山から来る人は、だいたいみんな「直行」です。

つまり、北朝鮮国内において相対的に貧しい地域出身の脱北者は、中国での長期滞在を経た後に韓国を目指す場合が多い。他方、相対的に豊かな地域出身の脱北者は、北朝鮮から「直行」するというのである。こうした対象者は、自らの脱北過程を語る際、最初から韓国を目指した「直行」であることを強調することがしばしばある。例えばCさんの場合、インタビューの際に、他の脱北者と区別するかのよう、「直行」であるかどうかを強く意識して次のように語る。

Cさん：あの人も「直行」で、私も「直行」ですよ。「直行」って知っていますか？中国で暮らさなかったんですよ、「直行」ですよ。

それではなぜ「直行」が増えてきているのだろうか。以下では、その背景を、すでに述べた脱北動機以外の2つの観点から説明する。

1) 北朝鮮における韓国の認識の変化

韓国を目的地とした脱北が増えた背景には、少なくとも中国と隣接する北朝鮮国内において、韓国に対する認識が大きく変化していることが挙げられる。

中国と隣接した地域で商売をしていたCさんの場合、商売を行う中で韓国に関する情報が得られ、さらに韓国製品を目にすることで、北朝鮮よりも韓国の方が豊かな生活をしていることに気づいたという。

Cさん：中国とつながって（＝商売して）いるでしょう。そのときに、韓国に関する噂をたくさん聞きました。北朝鮮にいたときからも、韓国製品が最高だということは知っていました。韓国製品が一番で、韓国製品を見るとみんな珍しがってね。（略）（韓国に対する認識が悪いのは）昔の話で、今はみんな韓国について知っています。知っているけど言えないだけでね、口にすると捕まるから。みんな知っています、韓国の方が豊かに暮らしているのは。

北朝鮮では、近親者に韓国出身者がいる場合には社会的な地位向上の大きな妨げとなる。また、韓国についての情報流入も厳しく制限されている。このように、南北朝鮮の苛烈な対峙状況の中では、北朝鮮の人々にとって、韓国は、言及することもタブーとされる敵国として捉えられている。しかし、非合法ながらも市場経済が蔓延していくにつれて、中国から韓国製品などが北朝鮮国内に浸潤するようになってきた。こうして北朝鮮の一部の人々は、北朝鮮政府が作り上げる韓国像とは異なる韓国の実態に触れ、韓国への強いあこがれを抱くようになってきている。

また、中国経由で北朝鮮国内に広まっている韓国のドラマ、映画、音楽の視聴経験は、韓国に対する好奇心やあこがれをより高める効果をもたらしている。北朝鮮に暮らしていた頃、乗務員をしていたDさんは、北朝鮮国内の様々な地域へ移動する中で入手した韓国ドラマを友達と隠れて見たという。その後、韓国ドラマを見たことを密告され、処罰を恐れて友達と一緒に脱北したが、その際に重要な契機となったのは、ドラマで見た韓国社会に対する好奇心であった。

Dさん：向こう（＝北朝鮮）で教育を受けたときは、ここ（＝韓国）はとても貧しいと言われました。だけど、テレビでドラマを見たら、そのようには見えなかったです。本当にあのような現実（が存在する）か、行ってみたいと思いました。（略）それ（＝ドラマ）を見ながら、あんなところへ行ってみたいという好奇心、好感度が高まったのです。

そして、事件が起きて、ここで死ぬか、行く途中で死ぬか（分からないけど）、とにかく（韓国へ）行ってみようと思心しました。

このように、中国経由で流入している韓国の情報や製品、文化アイテムを通じた韓国経験という衝撃は、北朝鮮の一部の人々における脱北の重要な契機として作用するなど、韓国に対する認識を大きく変化させつつある。

2) 韓国に定着した脱北者からの情報

韓国に直行する脱北が生じているもう一つの背景には、一足早く北朝鮮を離れて韓国に定着した脱北者から、韓国に関する情報を得られやすい状況になっている実態がある。近年、韓国に在住する脱北者の多くは、中国や北朝鮮内に存在するブローカーを利用して北朝鮮に残した家族に連絡を取り、経済的な支援を行っている。また、韓国に定着した脱北者は、北朝鮮の家族を韓国へ呼び寄せる努力を行っており、家族を説得する過程で、中国での不法滞在者としての境遇、韓国政府から得られる補助金や住宅手当、韓国での生活事情、脱北過程やルートなどの具体的な情報を伝達する。このように先に脱北に成功した家族からの情報の広がりにより、当初から韓国行きを試みる脱北が増えてきているのである。

Bさんは、ある事情により結婚してまもなく脱北した元夫から10年後に連絡があり、息子の将来のために韓国を行先とする脱北を勧められたという。彼女は、これまで脱北や韓国行きを考えたことがなかったために最初は夫の提案を断った。しかし、実際に韓国で生活をしている夫に金銭的支援を受けたり、様々な情報を得られることで、長男を先に韓国へ送り、その後、次男と一緒に脱北を実行した。当初より韓国を目指した脱北を決心できたのは、元夫の説得と経済的支援を含む様々なサポートがあったからである。

Bさん：元夫から10年ぶりに連絡が来たのです。それで、上の子を先に韓国へ送りました。(略) (元夫が)人を送って電話をつないで、「息子を(韓国へ)送れ」と(夫から)言われて、「ダメだ」と。「大変に大事に育てた子どもなんだから送れない」と言ったけど、「子どものために(韓国へ)行かせた方がいい」と。「そこ(=北朝鮮)だと(息子が)ろくに生きられない」と言われて、私も決心して(息子を)送りました。自分(=夫)も(韓国に)来て無事に生活しているから(韓国へ送っても)大丈夫だと言うので、ずっと悩んだ末、息子を(韓国へ)送りました。

一方、韓国在住の脱北者が北朝鮮国内の家族を経済的に支援するようになったことは、被支援者が北朝鮮国内で韓国に対する過剰なあこがれを抱くようになるという副作用ももたらしている。Bさんは、北朝鮮における韓国のイメージについて次のように述べている。

Bさん：結局、北朝鮮（の人）が一番あこがれるのは韓国です。韓国へ行くと、みんな金持ちになれると思っています。今は、中国ではなく、韓国にあこがれます。（略）以前は、（脱北して）韓国へ行く人は少なかったのです。韓国（にいる人）と電話することもできなかったのです。けど今は、（韓国へ行く）脱北者がすごく多いですよ。そして、（韓国にいる）脱北者は（北朝鮮にいる家族が）餓えないようにお金を送ったりするでしょ？（略）そうやって（韓国にいる）脱北者が北朝鮮（にいる家族）と連絡するようになって、韓国に対するあこがれが高まったのです。だから、中国へ行くと（男性に）売られて大変だと聞いて、（略）今はみんな韓国を目指して（北朝鮮を）出ていきます。

つまり、韓国に定着した脱北者がブローカーを通じて北朝鮮国内にもたらす様々な情報や経済的な支援は、一方で韓国に対する実態的な認識変化を誘っているが、他方で「韓国へ行くと、みんな金持ちになれる」といった韓国に対する幻想をもたらししている側面もある。

4. 終わりに

以上、本稿で得られた知見をまとめておこう。まず、本稿が対象とした韓国在住の女性脱北者の脱北動機を見てみると、従来の政治的理由や生活の困難に還元できない脱北動機の多様化が窺われる。具体的には、より安定的な生活や行動の自由を求めたり、子供の将来を考慮したりしたことを理由に脱北しているということである。

こうした脱北動機の多様化が見られる中で、特に「直行」の登場は注目に値する。従来の脱北は、生活の困窮を動機とし、韓国へ至る過程においては長期の中国滞在が典型とされていた。だが「直行」と呼ばれる脱北は、当初から韓国行きを目的としているがゆえに、中国滞在はごく短期間である。その背景には、北朝鮮の一部において韓国社会の認識の変化がみられることに加えて、すでに韓国に脱北をしている家族から北朝鮮に残された家族に伝えられる情報がインパクトを持って受け入れられている実態がある。その意味で脱北過程における「直行」の登場は、脱北という人的移動の動向に大きな変化をもたらす端緒となる可能性がある。

とはいえ、本研究は限られたケースからの分析に過ぎない。しかし、その知見は今後の脱北の趨勢や脱北者の特徴を示唆する可能性を持つものであり、より多くの事例を通じての検証が今後の課題である。

参考文献

イキョドク・イムスンヒ・チョウジョンア・イキドン・イヨンフン, 2007, 『セト民の証言からみた北朝鮮の変化』統一研究院. (=이교덕·임순희·조정아·이기동·이영훈, 2007, 『새터민의

- 증언으로 본 북한의 변화』 통일연구원.)
- イグムスンほか, 2003, 『北韓離脱住民適応実態研究』 統一研究院. (= 이금순 외, 2003, 『북한이탈주민 적응실태 연구』 통일연구원.)
- 이스ンヒョン・キムチャンデ・진미지, 2009, 『脱北民の家族解体と再構成』 ソウル대학교출판문화원. (= 이순형・김창대・진미정, 2009, 『탈북민의 가족 해체와 재구성』 서울대학교출판문화원.)
- イファジン, 2011, 「脱北女性の異性関係を通してみた人権侵害構造と対応——脱北及び定着過程を中心に」 『平和研究』 秋号: 376-404. (= 이화진, 2011, 「탈북여성 의 이성 관계를 통해본 인권침해 구조와 대응——탈북 및 정착과정을 중심으로」 『평화연구』 가을호: 376-404.)
- 北韓離脱住民支援財団, 2012, 『2012 北韓離脱住民実態調査』. (= 북한이탈주민지원재단, 2012, 『2012 북한이탈주민 실태조사』.)
- 脱北女性連帯, 2011, 『脱北女性の人生と生涯』. (= 탈북여성연대, 2011, 『탈북여성의 삶과 생애』.)
- チョウヨンア・ジョンウテク, 2005, 「脱北女性の韓国社会適応問題——結婚経験者を中心に」 『韓国心理学会誌』 10(1): 17-35. (= 조영아・전우택, 2005, 「탈북여성들의 남한 사회 적응 문제——결혼 경험자를 중심으로」 『한국심리학회지』 10(1): 17-35.)
- 統一部, 『北韓離脱住民政策』 (<http://www.unikorea.go.kr>). (= 통일부 『북한이탈주민정책』.)
- 統一部統一教育院, 2013, 『北韓知識辭書』. (= 통일부통일교육원, 2013, 『북한지식사전』.)
- ユンヨサン, 2004, 「在外脱北者実態——現況と代案を中心に」 『第7期北韓人權難民問題アカデミー資料集』 北韓人權市民連合. (= 윤여상, 2004, 「재외탈북자 실태-현황과 대안을 중심으로」 『제7기 북한인권난민문제 아카데미 자료집』 북한인권시민연합.)

キーワード 女性脱北者、脱北動機が多様化、韓国への直行

〔付記〕本研究は、平成26年度科学研究費研究活動スタート支援「脱北女性の『脱北過程経験』と韓国社会への適応に関する社会学的考察」(課題番号: 26885069)の成果の一部である。

(YOON Jinhee)